

*フィリッポスからローマへの使節（一九一〇年）⁷

三 同じ頃、元老院はフィリッポスからの使節と交渉した。(二)すなわち彼からの使節はアンティオコスにたいする戦争で王がローマ人にたいして示した好意と熱意を説明するために来ていた。(三)それを聞いた元老院は息子のデーメトウリオス⁸を人質から解放した。同様にこの状況にお

*アカイアーのエウメネースとの同盟（一九一〇年）

三b ギリシアでも、エウメネース王の使節が同盟の申

7 リーウィウス第三六卷三五・一二―一三はこの使節をギリシアにおける前年の出来事の説明の未決のものとして記録している。アカイリオスとフラミニウスがアイギオンでのアカイアーの会議を訪ねた後、エペイロスの使節が委託された元老院の前で自分の立場を弁護するためにローマに来た。

8 第一八卷三九・五脚注を参照。デーメトウリオス（ほぼ十五歳頃）は一九七年にテンペーでなされた合意の下で人質としてローマに送られていた。

いてローマにたいして忠誠を守ったので、貢税の免除を約束した。(四)同様にラケダイモン人の人質もナビスの息子アルメーナスを除いて解放した。彼はその後しばらくして病気で亡くなった¹⁰。

し出を持ってアカイアーに来た。(二)アカイアーの人々は会議へ集まり同盟を批准し、若者たちを派遣した、すなわち、千人の歩兵と百人の騎兵¹⁴を。彼らをメガレーポリスのデー

9 マケドニアとトゥラケーを通過しての今度のローマ軍の進軍を援助することによつて。

10 彼を保持しておく有利さがこのようにして元老院から奪われた。

11 多分抜粋者によつて付け加えられたもの。

12 外国の使節からの（軍隊の海外派遣を含む）提案を聞くために特別に召集されたアカイアー人の会議。

オファネースが指揮した。

*アイトリーアーは休戦の延長を手に入れる²

四 アンフィツサがローマ人の司令官グラブリオーに

13 リーウィウス第三七卷二〇・二は彼らを「老練な戦争の経験の
有る人びと」と述べている。若者は兵士を言い表す一般的な語である。
この部隊は後にベルガモンの近くで効果的な援助を与える（リー
ウィウス第三七卷二〇・二一二）そしてマグネーシアで戦った
（リーウィウス第三七卷三九・九）。

14 リーウィウス第三七卷二〇・一を参照。

1 パウサニアース第八卷三〇・五、五一・一を参照。フィロポイ
メーンの下での彼の経験については九・一を見よ。一九二一年秋の將
軍としての彼の選出は彼がいぜんとしてフィロポイメーンの支持者
だったことを示唆する。しかしすぐに敵意が彼らの間に生じた。

フィロポイメーンは一九二一年の冬までには彼の政策に批判的とな
っていた（プルタルコス「フィロポイメーン」一七・一）。フィ

ロポイメーンがディオファネースとフラミニウスをスパルテ
ーから排除し、自分自身を仲介者に据えたとき、衝突が起った。夏に
はディオファネースはローマ人の圧力の下でメッセニアから退
いた（リーウィウス第三六卷三一・一一〇）。そしてザキュントス
は引き渡されるべきだというフラミニウスの要求に屈した（リー
ウィウス第三六卷三一・一〇一三二・九）。

よって包囲されていたとき、そのときアテナイの民衆は
アンフィツサの辛苦とプブリウス・スキピオーの到着
を聞いた。(二)そこでルーキウスとプブリウス・スキピ
オーに挨拶し、アイトリーアー人との和平を手に入れるこ
とができるかどうか試みるためにエケデーモス⁴一行を使節

2 スキープイオー軍は一九〇年三月ブルンディシウムに整列してい
た。それゆえに一九〇年の四月の終り頃にアンフィツサに到着して
いたのだろう。アイトリーアーに与えられた六ヶ月の休戦は一九〇
年の五月から十月に亘るものと考えられる。

3 ロクリスで最大で最も有名な都市（パウサニアース第一〇卷三
八・四はデルフォイの北西六〇スタディオン（二〇・八キロ）にあっ
た）。

4 エケデーモスは四世紀後期から五あるいは六世代に亘って影響
力を持っていたキュダテナイオン区の富裕な家系の出であった。
彼は多分ソシゲネースがアルコン職にあったときに皆に自費で
塔を献じた人だった。彼はヘルモゲネースのアルコンの下での寄付
者だった。そして当時親ローマ派だったエウリユクレイデースとミ
キオンの学校で訓練を受けていた。